

甲賀市史

【第七卷】甲賀の城

補遺



〈収録対象〉

- ・ 貴生川遺跡
- ・ 今郷城跡
- ・ 上田城跡

発行日：令和5年(2023)12月1日
編集・発行：甲賀市教育委員会事務局歴史文化財課

貴生川遺跡

水口町貴生川小字森立

貴生川遺跡は、J R草津線と近江鉄道、信楽高原鐵道が交わる貴生川駅の北東約五〇〇メートルに位置する。

遺跡は、柚川が形成した河岸段丘面端部に立地する。南側には二メートルを超える高低差があり、南西から北西側に眺望がひらけており、柚川を見下ろす位置にある。

貴生川遺跡は、平成二十（二〇〇八）年に、土地区画整理事業に伴う試掘調査で新たに発見された遺跡である。平成二十六・二十七年に行われた本発掘調査で、弥生時代から鎌倉時代にかけての集落跡と、安土桃山時代の城跡を検出した。

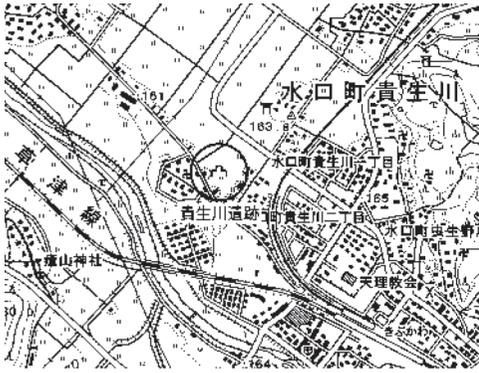


図1 貴生川遺跡位置図

城の形態は、一辺約五〇メートル（半町）の堀と土塁に囲まれた平地の単郭方形城館である。曲輪内部の大きさは、約二五メートル×二九メートルのやや長方形を呈している。土塁の内側裾では、幅四〇・四センチメートル、深さ八〜一〇センチメートルの溝を検出しており、排水路であったと考えられる。曲輪内で建物は確認できていないが、石組井戸や、大型の結桶を設置した土坑などを検出した。



写1 北東からみる貴生川遺跡

土した。

土塁は堀の内側で検出した。土塁基底部の幅は五〜八メートルであり、土塁の構築時に曲輪内部を削っているため、基底部は削り出されたようになっていいる。土塁の上部は削平されており、本来の高さは不明である。しかし、堀の幅と深さから、土塁の高さを推測すると、堀底から五メートルを超える高さであったと推定できる。

これらの発掘調査の成果から、城館は十六世紀後半を中心とする時期に機能し、十七世紀前半頃に曲輪、井戸、堀が埋め立てられたと考えられる。

た。なお、遺構の重複関係が確認できることから、複数回の改変があったと考えられる。

曲輪の内部を埋め立てた土からは、十六世紀後半から十七世紀初頭の信楽焼播鉢などが出土した。

堀の西南部は調査区外となるが、ほぼ四周を囲むように検出した。堀は幅約六メートル、深さ二・六〜二・八メートルで、埋土からは十六世紀後半の信楽焼播鉢や漆器椀が出土した。



図2 貴生川遺跡遺構図



写2 堀断ち割り土層断面

この城館の築城もしくは改修の契機は、永禄十一（二五六八）年に始まった織田信長の近江侵攻が想定される。その後、天正十三（二五八五）年の豊臣秀吉による甲賀衆の改易処分「甲賀ゆれ」によって、甲賀衆が築いた城と同じように、貴生川遺跡の城館も廃城となったと考えられる。

また、貴生川遺跡では城館東側の隣接地において、十三世紀の溝と土塁囲いの屋敷地が見つかっている。城館築城以前の集落の変遷がわかる事例としても注目すべき遺跡である。

（伊藤航貴）

《参考文献》

- ・甲賀市教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会『貴生川遺跡発掘調査報告書』、甲賀市教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会、二〇一七年
- ・甲賀市教育委員会『貴生川遺跡第4次発掘調査報告書』、甲賀市教育委員会、二〇一八年

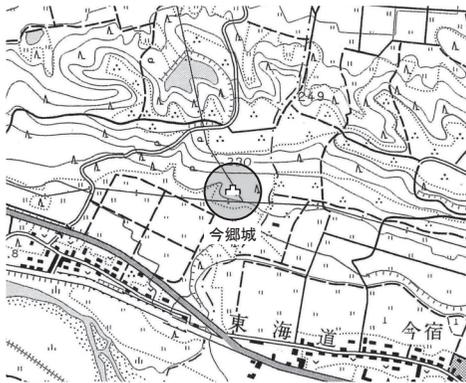


図3 今郷城跡位置図

今郷城跡

水口町今郷小字崩谷

今郷城跡は、今郷集落の北東方背後の丘陵上に位置する。周辺にはほとんど城館跡が存在しない空白地帯である。城跡については『甲賀郡志』に城跡の記載はあるが、城主等については一切不明である。

城跡は、東西に伸びる丘陵の南方へ突出する尾根先端部を利用して築かれている。このため東西は谷筋となり、北面のみが尾根続きとなる。

その構造は方形単郭の典型的な甲賀型城館である。西辺は約三〇メートル、北辺は約二五メートル、東辺は約三五メートルの土塁が残る。いずれも土塁の高さは約一・五〜二メートルあり、上面の幅は約二メートルを測る。周囲を廻る空堀は幅約四メートル、深さ約一〜一・五メートルを測る。

城跡西南隅部では土塁が折れ曲がり、南辺は凸状に突出するようである。城が尾根先端に構えられていることより南辺には土塁は廻るものの空堀は設けられていなかったようである。ただ、東南隅部が関西電力の送電鉄塔によって



写3 北東隅から南を臨む

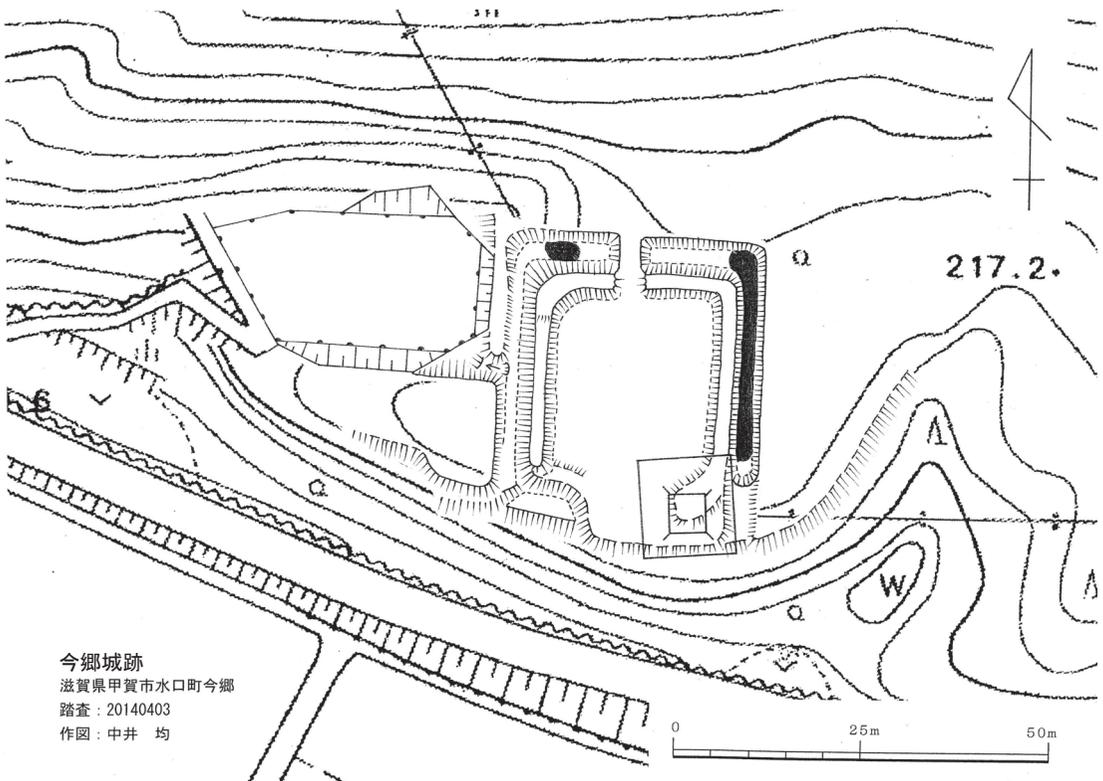


写4 北西隅から南を臨む

破壊されており、南辺の構造の詳細は不明である。
北辺の中央部の土塁は開口しているが、その断面は新しく近年の破壊によるものとみられる。開口部の堀には土橋が架かり、東西辺には虎口こぐちが認められないことより、本来も北辺中央部に虎口が構えられていたものが、近年に幅を広げるために、土塁部が切り崩されたとみられる。

小規模ではあるが、城館跡としての遺構は一部を除いて良好に残されている。これまで城館跡の空白地であっただけに、今郷城跡の存在は注目される。なお、地元では今郷城跡の西側にも城跡の伝承を伝えているが、痕跡は認められない。 (中井均)

(註)今郷城跡は、平成二十五(二〇一三)年二月に「今郷好日会」により見いだされ、翌年四月に中井均氏(滋賀県立大学教授・当時)とともに現地調査を行った結果、新発見の城跡と確定したものである。



今郷城跡
滋賀県甲賀市水口町今郷
踏査：20140403
作図：中井均

図4 今郷城跡概要図(中井均氏作図)

上田城跡

甲賀町大原上田小字小山田

上田城跡は、大原上田集落の北方背後の丘陵上に位置する。城跡の北東には大原氏の墓所がある。城跡の位置する丘陵は、大原川と大橋川の間で東西に伸びており、城跡の西側には大原上田城跡、大宝寺遺跡が点在する。これらの城跡は大原に所在することより、大原同名中によって築かれたものと考えられる。特に上田城跡は大原氏の菩提寺常光寺の背後に位置することや、墓所に近接することより、大原氏の居城と考えられる。

城跡には東辺の土塁と空堀が残されている。残存する土塁は城内側で高さ約二メートル、城外側の堀底より高さ約四メートル、幅は上端で約二メートルを測る。空堀は幅約四メートル、深さ約

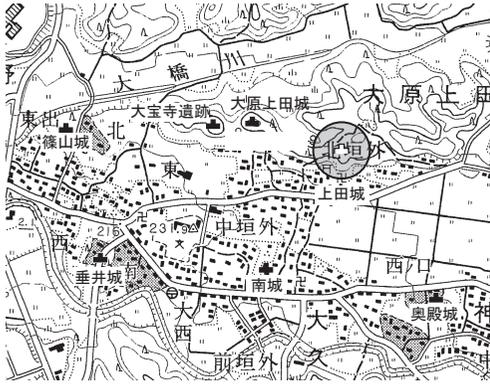


図5 上田城跡位置図

二メートルを測る。その残存

状況は良好で、約四〇メートルが残されている。南端は土塁が開口しており、虎口であった可能性が高く、土塁外側には土橋が架かる。

土塁は大きく「く」の字状に折れ、北端で大きく西側に向くものの、北辺は林道によって破壊されたようで、土塁は認められない。さらに、西辺についても道路造成に



写5 曲輪内部からみた上田城跡



写6 上田城跡の土塁

よって土塁や空堀の遺構は認められない。南辺は破壊を受けていないものの、土塁は構えられていない。

こうした状況から上田城跡は方形の甲賀型城館構造ではなかったようである。

(中井均)

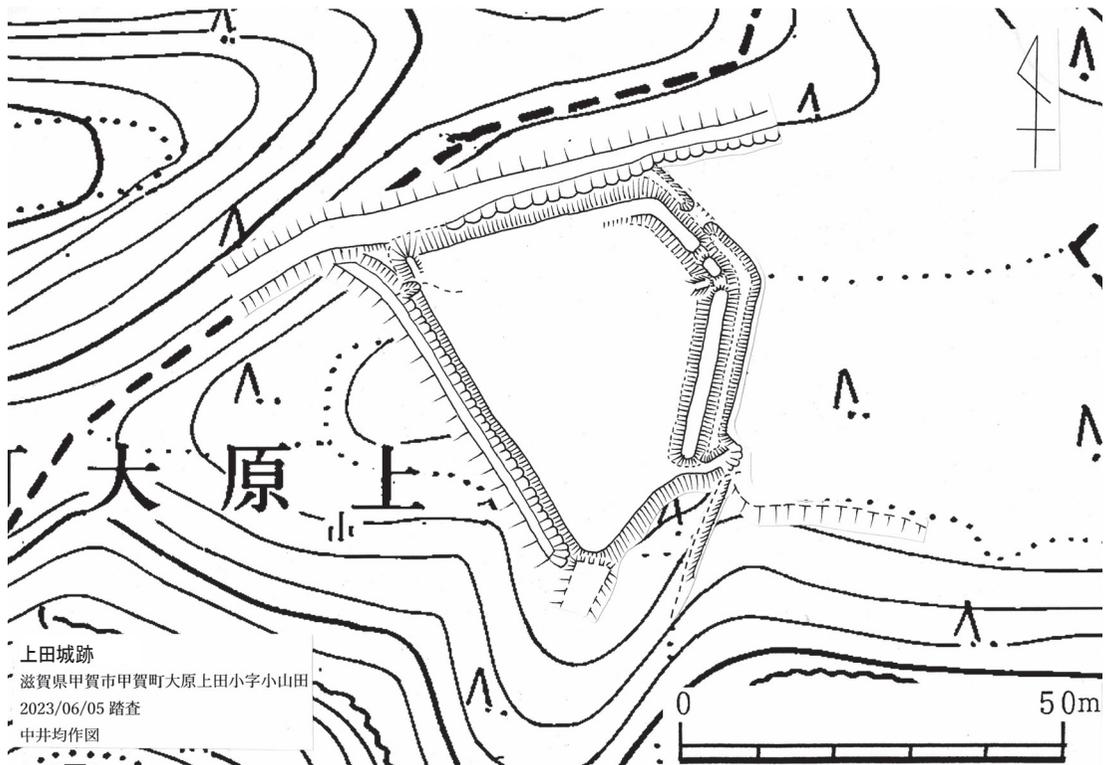


図6 上田城跡概要図(中井均氏作図)

【上田城跡 註記】

上田城跡に関しては、すぐ西にも現在「大原上田城跡」と呼んでいる城跡があったためか、2010年の『甲賀市史』第七巻も含め、1980年代の城館分布調査当初から以下のような取り違えや混乱がみられる。

- ・1980年『日本城郭大系』第11巻(平井聖ほか編、新人物往来社)
→大原上田城跡のみ採録
- ・1984年『滋賀県中世城郭分布調査』2(甲賀の城)(滋賀県教育委員会編・発行)
- ・1994年『甲賀町史』資料編(甲賀町史編纂委員会編、甲賀町)
→大原上田城跡を上田城跡と表記。本来の上田城跡を「的場」として紹介し「小字宮ノ東の小高いところに、室町時代に弓矢の練習の場であったと伝えられ、盛り土や堀の跡が残っている」と説明
- ・2003年『甲賀町内遺跡詳細分布調査報告書』(滋賀県甲賀町教育委員会)
→「上田城遺跡」として、現在の大原上田城跡と上田城跡を一体のものとして採録し、「大原氏の一族である上田氏の居城といわれている。的場と呼ばれる弓馬練習の場であったと伝えられ、盛土や堀跡が残っている」と説明
- ・2010年『甲賀市史』第七巻〈甲賀の城〉(甲賀市史編さん委員会編、甲賀市)
→大原上田城跡のみ本文で紹介し、上田城跡は巻末一覧表の476ページに城跡伝承地として採録
- ・2015年『ふるさと再発見 大原』(藤村稔監修/大原自治振興会教育文化部員企画・執筆、大原自治振興会)
→『甲賀市史』によって大原上田城跡を紹介し、『甲賀町史』によって上田城跡を「的場」として紹介。説明は両書に同じ
- ・2022年『令和3年度 滋賀県遺跡地図』(滋賀県編・発行)
→遺跡番号 365-017「上田城遺跡」と遺跡番号 365-129「大原上田城遺跡」を採録。番号からみて、先に「上田城遺跡」が登録され、のち『甲賀市史』第七巻を典拠として「大原上田城遺跡」を追録

今回紹介した上田城跡が『甲賀市史』から漏れたのは、城跡の近接、遺跡名の近似、2城を一体とする甲賀町の詳細調査など、錯綜する情報をうまく整理できていなかったためと思われる。上田城跡と大原上田城跡の情報は、『甲賀市史』第七巻と補遺とを合わせたものが最新となる。(甲賀市教育委員会事務局歴史文化財課)



貴生川遺跡 (水口町貴生川)